



公益社団法人
日本ナショナル・トラスト協会
The Association of National Trusts in Japan

第33回 日本の美しい風景を守り、活かす

ナショナル・ トラスト 全国大会

2016年 2月 27日 (土)

14:00 開会

【会場】日比谷図書文化館 B1F コンベンションホール

【主催】公益社団法人 日本ナショナル・トラスト協会

【後援】環境省

報告書

ナショナル・トラスト全国大会は、多くの皆様にトラスト活動の取り組みについて知っていただくとともに、全国でトラスト活動を行っている団体同士の情報交換や交流を図ることを主な目的としています。今回は「日本の美しい風景を守り、活かす」をテーマとして開催しました。



第一部

14:00 開会

14:20 日本ナショナル・トラスト協会 2015 年度の活動報告

14:40 基調講演 | 地域の資源を活かした「最も美しい村」づくりへ
NPO法人「日本で最も美しい村」連合 常務理事 杉一浩氏

15:30 休憩

15:40 地域からの報告 | (公財) 妻籠を愛する会
(公社) 生態系トラスト協会
(公財) 埼玉県生態系保護協会

16:30 パネルトーク | テーマ：日本の美しい風景を守り、活かす

17:30 閉会

第二部

17:40~19:00 交流会

第一部

開会挨拶

(公社)日本ナショナル・トラスト協会
会長

池谷 奉文



本日は全国各地から、多くの皆様にご参加いただきありがとうございました。また、開催にあたり、ご後援・ご協賛いただいた皆様に深く感謝申し上げます。おかげさまで、当協会が全国に所有するトラスト地は42カ所、総面積は1,705haになりました。特に今年度、特徴的な出来事のひとつは、北海道の黒松内町と一緒に歌才湿原を購入したことです。民間団体と行政が土地を共有するのは日本で初めてのことです。もうひとつ

は、埼玉県にある日本百名山・両神山の頂きを含む土地1,200haを埼玉県生態系保護協会と一緒に購入したことです。他団体とともに土地を持つのも初めてで、日本のトラスト活動の今後のひとつのモデルになると思います。

ニュースレターの表紙の写真は、朝焼けに赤く染まる両神山です。この山を視察したときに驚いたことがあります。早朝にも関わらず野鳥の声がほとんど聞こえないことでした。全国的に野鳥が減って

いるのは、明治時代に日本の野鳥の剥製が大量に海外に輸出されたことが原因と言われています。そして、その後も開発で自然林も水田も川も元の姿を失い、日本は自然と共存する姿ではなくなってしまいました。我々の生存基盤である美しい自然を取り戻すために、トラスト活動は非常に重要です。今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

開会挨拶

(公社)日本ナショナル・トラスト協会
最高顧問

愛知 和男



33回目の全国大会に、全国各地からお集まりいただき誠にありがとうございます。ナショナル・トラスト活動も着実に発展している様子で、嬉しい限りです。それも、本日お集りの皆様の様々なお支援、ご協力の賜物と思い、心より感謝申し上げます。

私が会長だった頃はなかなか苦しい時期もあったわけですが、おかげさまで今は軌道に乗っております。協会自体がトラスト地を所有するという新しいステージに入

り、数も面積も非常に増えてまいりました。発祥の地イギリスでは、ナショナル・トラストが英国女王に継ぐ大地主ということで、それに比べればまだまだですが、今後も着実に増やしていきたいと思えます。

また、トラスト地は維持するだけではなく、どのように活用していくかも重要です。最近では海外からのお客様も非常に多くなっており、リピーターも随分と増えていきます。1回目に爆買いをして帰っ

た人も、次は何か新しいものを見たいと思う、そういう人にトラスト地を訪れてもらうという新しい切り口もあると思います。地域の財産をどのように活かしていくかは大変重要なことです。今日の大会を情報収集や交流を深めていただく機会にさせていただき、今後の活動の礎にさせていただけたらと思います。

来賓挨拶

環境省 大臣官房審議官
亀澤 玲治 氏



本日は33回目となります全国大会の開催、おめでとうございます。今回のテーマは「日本の美しい風景を守り、活かす」と聞いておりますが、環境省も、優れた自然の風景地を国立公園として指定し、併せて利用の推進も図っているところです。今年は西表・石垣国立公園の大規模拡張が4月には実現する見込みです。また新しい国立公園として、やんばる地域と

奄美地域が最終段階に差しかかっております。いずれも世界自然遺産登録の前提になるもので、多くの方の後押しをいただきながら、登録の準備が進んでいることを心強く感じております。

環境省では昨年12月に、生物多様性保全上重要な里地里山を500カ所選定いたしました。日本の自然は人の暮らしの近くにあり、人の営みに支えられています。地

域固有の自然があり、地域ならではの文化や歴史と結びついています。それが観光をはじめ、地域産業の活性化や地方創生の取り組みにもつながっていくと思います。それには市民の皆様をはじめとする、多くの主体の参画が欠かせません。ナショナル・トラスト活動は、行政の取り組み以上に地域と深く結びついている重要な活動と思っております。環境省としても、ナショナル・トラスト活動と連動して、様々な取り組みを行っていきたくと考えております。

協会のトラスト地は42カ所、計1,705haに



活動報告

(公社)日本ナショナル・トラスト協会
事務局長
関 健志



社団法人である当協会には、現在、35の団体が構成メンバーとして参加しており、全国各地で様々なトラスト活動を展開しています。当協会自らが8年前からトラスト地の取得を開始し、現在42カ所、1,705haを所有しています。今年度は新しく7カ所の土地を取得しました。

そのうち歌才湿原と両神山のトラスト地取得は購入によるもので、歌才湿原は黒松内町との共有、両神山は埼玉県生態系保護協会との共有という新しい試みです。どちらも全国の皆様からの多大なご支援のおかげで実現しました。また、世界最大級のアオサンゴ群落があ

る石垣島の白保地区(沖縄)、嵐山(京都)、越後湯沢(新潟)、静狩湿原(北海道)、UR都市機構が所有していた津市内の森(滋賀)を譲り受けました。

自然保護助成基金との共催によるナショナル・トラスト活動助成は11年目を迎え、今年度は阿蘇花野協会によるトラスト地取得費用を助成しました。企業との連携による普及啓発活動も進めており、エポスカードや大東文化大学をはじめとする募金プログラムへの参加、社会貢献型の自動販売機の設置等に取り組みました。



歌才湿原トラスト (北海道黒松内町)

地域の資源を活かした 「最も美しい村」づくりへ

NPO 法人「日本で最も美しい村」連合 常務理事 杉一浩氏



「日本で最も美しい村」連合は設立10年目を迎え、現在の加盟数は60です。加盟するには人口が概ね1万人以下で、独自性の高い地域資源を有する自治体・地域であることが条件です。入会審査があり、加盟後も5年ごとに再審査があり、独自の景観条例の作成などを求めます。ナショナル・トラストとの関係では、妻籠宿のある南木曾町や、歌才湿原のある黒松内町が加盟しています。

「美しい村」運動は、「そこに住んで良かった」と思う豊かな農村生活の実現を目指し、相互に学び合う場です。美しい景観、財産、文化を未来に残すには、経済的な自立と住民自治が大きな柱になります。最終的には、自分たちの運命は自分たちで決める、という自立する村づくりへの覚悟だと思っています。

美しい村の経済は、地域資源に

付加価値をつくり、入りを増やして出を制し、地域外にお金を出さない地域内流通を目指しています。課題は、経済的自立と人口減少に歯止めをかけることです。総務省の国勢調査では5年間で94万人の人口減です。美しい村も5年間で7～8%の人口が減っていますが、加盟後、人口減に歯止めがかかった町村が4つあります。それを分析すると、若者の移住促進には住宅整備などのハード面より、固有の町づくり政策を持続していることが大きく、いずれも首長の独自のビジョンに惹かれたIターン者やUターン者が定着し、起業が成功しています。

住民参加は、結果よりプロセスを大事にすることで、人が人を呼び地域全体が元気になります。また、美しい村の子どもをどう育てるか。子ども時代に良い思い出をつくれるかは、将来、大人になっ

たときに戻ってくるかどうかに関わってきます。新しい教育の試みや森の幼稚園などの町の教育政策に惹かれ、遠隔地から移住してくる家族もいます。

これからの「美しい村」連合は、それぞれの地域に特化したビジョンを作成し、地域資源の見直しも含めて話し合い、独自の景観条例の作成や自立の道を探り、誇りが持てる地域づくりに取り組んでいきたいと思っています。



発祥の地、フランスの「ラ・ロック・シュール・セーズ」は、見上げて美しく、空から見ても美しい村。地域全体の価値を上げることで、都市部と比較しても不動産価格は遜色ない。

学び (日本 自立の村づくり 先進事例)

前上勝町長 (徳島、中山間地) 笠松さん

- ・「ごみゼロ」
- ・「葉っぱビジネス」 薬草料理
- ・「カフェやイタリアン開業」



海士町 (島根、離島) 山内町長

- ・「冷凍流通CAS」
- ・「若者の呼び込み」
- ・「若者の起業」



智頭町 (鳥取、中山間地) 寺谷町長

- ・「疎開保険」
- ・「森のようちえん」
- ・「地域通貨」



徳島県上勝町、島根県海士町、鳥取県智頭町など、町長のビジョンに惹かれて多くの人が集まってくる。

プロフィール

国内電機メーカーで勤務した後、2001年よりフランスに赴任したのを機に、週末を中心にフランス各地の田舎巡りを始める。目標にしてきた「フランスの美しい村」全144村の訪問を2005年に完了。その旅行記を整理して、2006年に「フランス四季の色と美しい村」(木楽舎)を発行した。現在、NPO法人「日本で最も美しい村」連合の常務理事として、全国の加盟自治体を巡りながら日本の美しい村づくりに取り組んでいる。

地域からの報告

中山道・妻籠宿における訪日観光の新しい動き

(公財)妻籠を愛する会 常務理事 藤原 義則 氏



妻籠宿には、歴史的な街並みと周辺の自然が一体となり美しい景観が広がっています。しかし、昭和40年代初めは、軒は傾き、材木を運ぶ車が頻繁に通る風景



昭和30年代後半の妻籠宿の様子。高度成長期に各地で古いものが壊されていった。

景が続いていました。何とか集落を保存しようと、行政や住民と一緒に全戸参加の住民組織「妻籠を愛する会」を昭和43年に立ち上げました。「売らない、貸さない、こわさない」という私たちの原則は、「売らせない、貸させな

い、こわさせない」ではありません。一人一人が自己を律して行動し、江戸時代から続く集落の形態を守り、道普請をし、里山の植樹や中山道沿いの草木の刈払いなどを続けてきました。

最近海外から非常に多くの人々が訪れ、馬籠峠を越える約9kmの街道歩きを楽しんでいます。年間3.5万人の観光客のうち日本人は減る一方で、海外の方は右肩上がりです。平成25年までは7千人強だったその数は、今年既に1.6万人、来年は2万人超えが予測されています。なぜこれほど海外の方に人気があるのか、魅力を尋ねると、徳川300年の街道と宿場の文化に触れられる場所はない、大名や侍が歩いた道を今自分も歩いている、栄泉や広重の世界を堪能できる、と言います。彼らは土の道、石畳、大径木の林、

滝、道端の石仏、山紫水明の景観を評価し、“Wonderful! Beautiful! Good!”と表現します。集落保存の取り組みを始めて48年、これまでやってきたことに間違いがなかったと自信を深め、今後も楽しんでやっていきたいと思えます。



妻籠宿は地区全体が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。



馬籠峠の側にある一石栃立場茶屋では、各国からのハイカーが交流をする姿が見られる。

ヤイロチョウの森トラスト活動の歴史・現在・未来

(公社)生態系トラスト協会 会長 中村 滝男 氏



当協会は、人類の生存基盤である自然生態系を数百年後まで保全するため、ナショナル・トラスト手法で仲間を募り、1994年に高知県で設立された市民団体です。高知県は繁殖が日本で最初に確認されたこともあり、絶滅危惧種のヤイロチョウが「県の鳥」に指定され、四万十町では「町の鳥」にも指定されています。しかし、ヤイロチョウは幻の鳥と呼ばれ、その習性は謎が多く、保護区の森もありませんでした。そこで、当協会は2002年に四万十町で初めて保護区の森を取得。トラスト地は約280haに広がりました。ヤイロチョウを通じて繁殖地の韓国や台湾、越冬地の南アジアの国々とも交流が深まり、当協会の活動へ国際的な理解が広がってきました。

昨夏、50年前まで二ホンカワウソが生息していた四万十川で自然

体験キャンプを開催しましたが、2014年7月に1億円の寄附金で四万十町に開設した四万十ヤイロチョウの森ネイチャーセンターが活動拠点となりました。



ヤイロチョウの森のトラスト活動を通じて、最終的な目標である自然生態系を復元するための様々な課題も見えてきました。地上に光が届かなくなった人工林の尾根筋に草地を再生させ、定置網方式でシカの被害防除実験を行う他、天然ウナギがヤイロチョウの森で成長する試験研究なども計画して

います。

最後に全国のトラスト団体が相互に交流しながら次世代を育成するため、全国大会を高知県で開催していただくよう提案します。



【四万十町(下道地区)トラスト地】

- 平成14年7月11日
① 第1期一口オーナー募金にて購入 (約9.5ha)
- 平成15年6月12日
② 第2期一口オーナー募金にて購入 (約11.5ha)
- 平成19年7月30日
③ 渡邊氏寄付により購入 (約12.6ha)
- 平成19年12月20日
④ ナショナル・トラスト活動助成会により購入 (約7ha)
⑤ ナショナル・トラスト活動助成会により購入 (約2.7ha)
- 平成20年11月
⑥ 渡邊氏寄付により購入 (約3.3ha)
⑦ 渡邊氏寄付により購入 (約5.9ha)

⑧、⑨ 募金計画地

【四万十ヤイロチョウの森ネイチャーセンターの開館】

(高知県知事) 長崎 正高 (協会会長) 中村 滝男

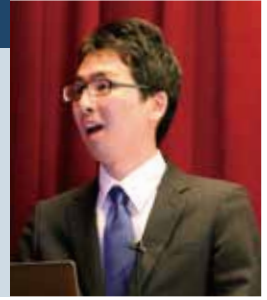
(来賓者)

記念イベントで『ヤイロチョウの森』を語るスタッフ、地元の子供たち、来賓のみなさん。

地域からの報告

両神山ナショナルトラスト 1,232haの取得報告

(公財) 埼玉県生態系保護協会 研究員 伊藤 惇 氏



埼玉県生態系保護協会は、自然が豊かであれば私たち人間も安心して暮らせる、そんな社会を次の世代に残せるようにと、埼玉県内を中心とした自然保護活動を進めています。1978年の設立から30年以上、多岐にわたる活動をしており、本日ご紹介するナショナルトラスト事業もそのひとつです。「水のトラストしよつ基金」は、埼玉県や東京都で暮らす人たちの水源地である秩父地域の豊かな森を守るため2002年に設立し、これまでに水源の森、約1,685haを取得してきました。

その7ヶ所目となるのが、今回、日本ナショナル・トラスト協会と共同で取得した両神山のトラスト地1,232haです。秩父多摩甲斐国立公園の一部を成す、両神山の山頂を含む広大な森で、自然保護目的で一度に取得した面積としては

国内最大規模となります。山腹に



険しい岩場には、春を可憐に彩るアカヤシオが見られる。

はブナやミズナラの自然林が広がり、沢が流れる豊かな森です。鎖場も多く、遭難者が出るほどの険しい山でもあります。岩肌が広がる山頂付近には両神神社があり、登山道の各所に弘法大師を始め、天狗や阿修羅などの石像があり、両神山が信仰の対象であったことがわかります。

今後は、各地から見える両神山の写真の募集や看板の設置、動物などの自然環境の調査、現地

協力してくださる応援団の募集、地元の方との交流などを考えています。国立公園とは言え個人所有の土地に関しては、その保全や活用は所有者に委ねられているのが実情です。このプロジェクトが、森の保全と活用について改めて、広く考えていくきっかけになればと思います。



石像は江戸時代には300体ほどあったと伝えられており、両神山が信仰の対象であったことが分かる。



両神山山頂への主要なルートである、日向大谷ルートを含む、険しい山々に囲まれた土地。



山頂付近から見たトラスト地。秋にはとても美しい紅葉がみられる。

ナショナル・トラストは50年程前に、開発から自然を守る活動として始まり今日に至っています。一方、最近では、妻籠宿のように訪日客が増えるといった活用の面からの話題も出ています。ヨーロッパでは自然を守るほど、観光業はもちろん農業などの一次産業も含めて産業が活性化するという話も聞きます。本パネルトークでは、特に一次産業、三次産業に焦点を当て、地域の資源を活かした産業を興す可能性について話合いました。

(公財) 阿蘇グリーンストック
副理事長

山内 康二 氏



阿蘇の草原は総面積が2.2万haあり、それを9,000戸の入会権者と160の牧野組合で維持管理しています。1990年代後半から後継者不足で、都市・農村・企業・行政の四者で「阿蘇の緑の生命資産を残そう」と1995年に阿蘇グリーンストックが発足しました。阿蘇の草原を守るには、地域振興が密接不可分と考え活動しています。

阿蘇には年間1,700万人が訪れます。草原が維持されなければ阿蘇の観光は大打撃を受けます。九州の経済界が入って阿蘇自然再生千年委員会が組織されたのも、九州全体の宝であるとの見方からです。これまで、草原で恩恵を受けるのは観光業者と言われ、観光と農業は相性が良くありませんでした。しかし最近では、野焼き見学ツアーを宿泊者向けに開発し、収益を草原保全に寄付する動きが始まるなど、草原を介し観光と農業が結びつこうとしています。かやぶき屋根の材料、堆肥など草資源の多様な活用に向けた検討も始まっています。

しれとこ 100 平方メートル運動
推進本部長／斜里町長

馬場 隆 氏



知床五湖は非常に風光明媚なところですが、以前はクマが出没すると閉鎖して、観光客が十分な体験をすることができませんでした。そこで、クマが出て安全に楽しめる高架木道を整備するとともに、2011年に利用調整地区制度を導入し、時期に応じて地上遊歩道の有料化と、ガイド引率を利用の条件としましたが、利用者は少しずつ増えています。クマが出て安心して利用できる状況が生まれ、ガイドも安定してお客様と接する機会が増えました。

加えて、漁業における観光利用も昨年からは試行が始まっています。サケの水揚げが13年間日本一の斜里町では、サケの定置網が小さい魚を捕らない資源管理型漁業の見本と言われていて、その網おこしを見学するツアーを始めました。見学自体は観光船で行うため、直接漁業者の所得にはなりませんが、知床のサケの素晴らしさ知ってもらうことで消費につながる可能性があり、観光関係者と漁業者が連携するようになっています。

NPO法人「日本で最も美しい村」連合
常務理事

杉 一浩 氏



持続的な元気なまちをつくるには経済が鍵です。その際、農業は時間軸が長く、観光業のほうは短いということを考える必要があります。米の需要が減少する中、農業にどう付加価値をつけるか考える必要があります。農業が観光業につながっている例もたくさんあります。例えば、農村景観は観光資源になり、美瑛町のように畑作の景観を目当てに観光客が来ています。ただ、通過型の観光にしてはいけません。美瑛町の美しい村のシンボルだったポプラの木が伐られてしまいました。人がたくさん来ればよいという発想は変えるべきです。その場で体験して、滞在してお金を落としてもらうヨーロッパのような滞在型の観光を目指すべきだと思います。



閉会挨拶

(公社)日本ナショナル・トラスト協会
副会長

漆畑 信昭



日本は四季の変化が明確で、その素晴らしい自然は世界の注目するところですが、高度経済成長期には開発のために急ピッチで自然破壊が進みました。特に問題なのは、都市近郊の水田の破壊と荒廃です。水田はお米をつくる以外に2つの大きな役割があります。梅雨と共に日本の夏の高温を抑える役割と、生物のゆりかごとしての

役割です。水田にはカエルやエビ、メダカ、ドジョウ、コブナ、ゲンゴロウなどいろいろな生物がいて、かれらは私たちの幼年時代の友達であり、少年期の健全な育成のための先生でもあります。ところが、農薬を使うと生物多様性の場所は死の世界となります。私たちには都市近郊の水田を再生する責任があり、水田をこれ以上減らさない

こと、農薬をまかないこと、農家が水田から水を引くのを極力やめること、そしてナショナル・トラスト運動で休耕田を買いビオトープ化していくことが重要です。非常に難しいですが、40年間の柿田川保護の歴史を振り返ってみると、できないことはないと思います。ただし、やる気がないとだめ、諦めたらだめです。自然を守るのも人間、壊すのも人間。私たちはぜひ、自然を守る人間になっていきたいと思います。今日はお忙しいところありがとうございました。

第二部

交流会には、講演者の方々をはじめ、各地のトラスト団体の関係者や支援者の皆様など55名の参加がありました。参加者同士の情報交換や交流の良い機会となりました。

参加団体 (50音順)

- (公財) 阿蘇グリーンストック
- NPO 法人阿蘇花野協会
- NPO 法人ウエットランド中池見
- (一社) エコシステム
- (公財) 柿田川みどりのトラスト
- (公財) かながわトラストみどり財団
- (公財) 鎌倉風致保存会
- 認定 NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト
- (公財) グリーントラストうつのみや
- 小網代の森と干潟を守る会
- (公財) 埼玉県生態系保護協会
- (公財) 自然保護助成基金
- しれとこ100平方メートル運動推進本部
- (公社) 生態系トラスト協会
- (公財) 世田谷トラストまちづくり
- (公財) 妻籠を愛する会
- (公財) 天神崎の自然を大切に作る会
- (公財) 日本生態系協会
- (公財) 日本野鳥の会



信託で守る ナショナル・トラスト

信託とは、英語で“トラスト”——
三井住友信託銀行では
信託を通じ、トラスト地の購入を支援しています。



人と自然をつなぐ、伝統と革新をつなぐ。

かつて先人たちが理想を追い、
実現してきたデザインや技術は、

現代に伝統として受け継がれています。

竹中工務店は、その伝統を尊びながら、

常に新しい価値や試みを取り入れ、

革新的なデザインや技術を

創り出すことを目指しています。

人と自然が共に豊かになるには

どうしたらいいのか、

未来の環境をつくる使命を持って

新しい建築を世に送りだしていきたい。

そして、10年後、20年後、100年後、

その建物が「新しい伝統」になり、

未来の建築家たちの

礎になることを願っています。

「最良の作品を世に遺し、

社会に貢献する」

竹中工務店は、この経営理念のもと、

建築の可能性を追い求めていきます。

写真：竹中大工道具館 設計施工：竹中工務店
兵庫県神戸市、六甲山の麓にある日本で唯一の
大工道具の博物館。

想いをかたちに 未来へつなぐ

 **TAKENAKA**